地域産自給飼料の栽培事例

～スーダングラス栽培の取組～

奥村剣二（海部農林水産事務所農業改良普及課）

【2026 年 10 月掲載】

【要約】

飼料価格の高騰を背景に、海部地域では未利用農地を活用したスーダングラス栽培に取り組んでいる。播種から鎮圧までの同時作業や牛ふん堆肥の活用により、省力化と生産コストの低減を図った。収穫物はホールクロップサイレージ（以下、WCS）として地域の肉牛農家で利用されており、2025 年度は良好な天候に加え収穫回数の増加により単収が向上した。本取組は国産飼料の安定確保と畜産経営の安定化に寄与するとともに、難防除雑草の抑草効果も期待される。

1　はじめに

現在、ロシア・ウクライナ情勢や円安の影響により、輸入飼料の高騰が続いている。畜産経営においては、経費に占める飼料費の割合が増加し収益を圧迫している。その様な状況下で、国産飼料への注目が高まり、水田を活用した稲 WCS、飼料米及び青刈りとうもろこし WCS が全国的に生産されている。海部地域でもそれらの生産に加えて、牛の飼料に用いるイネ科牧草の一種である「スーダングラス」の生産が 2023 年度より新たに開始されたので、その取組について紹介する。

2　取組の概況

（１）取組概要

この取組では、酪農家の所有する未利用農地約２ha で栽培が開始され、現在では、青刈りとうもろこしとの輪作が行われている。酪農家では、栽培に必要なトラクター等の農機具を所有していないため、全ての作業は近隣のコントラクター（農作業受託事業者）によって実施されている。

（２）作業体系

一般的な牧草の栽培は、①堆肥散布、②耕起、③播種、④覆土、⑤鎮圧、⑥収穫作業の体系となるが、海部地域では異なる作業機を組み合わせて、③播種、④覆土、⑤鎮圧の作業を同時に行い（写真１）、①堆肥散布、②耕起、③播種・覆土・鎮圧、④収穫作業の４工程に省力化している。



写真１　播種等に用いた作業機

（３）施肥・防除

施肥は、生産コストの低減及びスーダングラスへの硝酸態窒素の蓄積を回避するために化成肥料を施用せず、酪農家で生産された牛ふん堆肥のみを施用している。施用量は 1t/10a を上限としている。また、問題となる病害虫の発生がないため、栽培中の農薬使用はない。

（４）収穫

一般的に牧草は１回の播種で数回収穫される。この取組でも再生草を含めて２～３回

収穫して、全て WCS に調製されている。また、貯蔵性や給餌時の作業性を高めるため水分を 60%程度まで低下させた予乾サイレージ（低水分サイレージ）に調製されている。

（５）利用状況

生産された WCS は、事前に栄養成分を分析した上で、乾物重 1kg 当たり 40 円で管内の肉牛農家に利用されている。

３　収量

図１に 2023 年度から３年間の総収量および単収を示した。総収量については、2023 年度、2024 年度の栽培面積は２ha に対して、2025 年度の栽培面積は 1.4ha で、栽培面積の減少に伴い総収量は減少したが、単収については、乾物重で約 1,000 kg/10a から 1,600 kg/10a と大きく向上した。これは、2025 年度が良好な気象条件に加え、2023 年度・2024 年度は、再生草の１回を含む２回の収穫に対して､2025 年度は適期に再生草２回の収穫を含む３回と収穫回数の増加が要因だと考えられた。

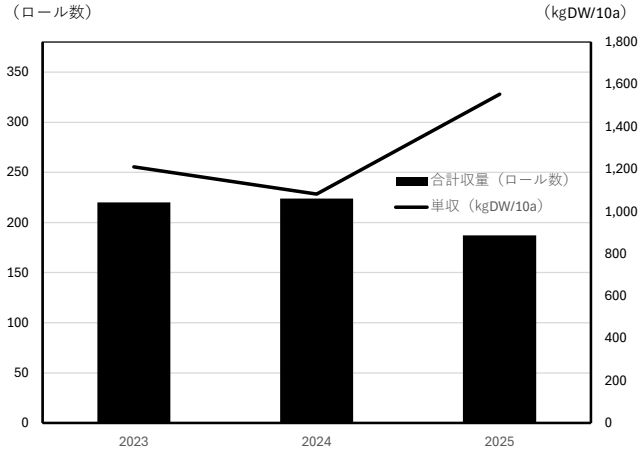


図１　総収量及び単収

４　最後に

ロシア・ウクライナ情勢の長期化に加え、円安の影響により、飼料価格が今後大きく低下する見通しは立っていない。このような状況の中、畜産農家における国産飼料への期待は一層高まっており、未利用農地を活用したスーダングラス生産は、畜産農家の飼料確保と経営安定に寄与することが考えられる。特に、施肥や防除を最小限に抑えつつ、高温条件下での旺盛な生育・再生力を活かすことで収穫回数を増やす事が可能であり、地域の気候条件に適した飼料作物であると考えられる。

また、この取組圃場では、例年帰化アサガオ類が繁茂し、青刈りとうもろこし WCS の生産を困難にしていたが、スーダングラスとの輪作を取り入れたことでそれらの発生量が減少し防除が容易になったとの意見が得られた。これは、スーダングラスの収穫時に、帰化アサガオ類の植物体も開花・結実前に圃場外へ持ち出されたため、その種子生産を抑えられたためと考えられる。その結果、帰化アサガオ数が減少し、帰化アサガオ類の発生が抑えられた可能性がある。

Copyright (C) 2026, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.